

愛媛大学地域創成研究センター活動報告

—— 平成19年度（2007年4月～2008年3月） ——

1 センター全体の活動概況

2007年度も前年度までの活動を引き継ぎ、重点研究をはじめ、「まちなか大学」の開催、「プロムナード・コンサート」の開催、地域シンポジウムの開催などに取り組み、学内の地域貢献組織の活動への助成・後援を行ったほか、道州制などに関する松山市との共同研究を進めるなどして、地域の政策や文化に関する研究や地域づくりへの貢献活動・地域との連携活動を継続してきた。

2007年度の重点研究は、2006年度からの2ヵ年計画で「愛媛県南予の地域振興」および「地域の文化資源の再開発」の研究を進めてきた。この研究成果は、近いうちにさまざまな形で公表される予定である。また、松山市と共同で進めてきた「道州制をめぐる松山市への影響と効果に関する研究」は2006年末まで続けられ、最終報告書のまとめを作成しているところである。

地域貢献・地域連携活動の一環として、消費者講座など「mitまちなか大学」を合計10回開催した。そのほか、今治市の高齢者向け市民講座「ことぶき大学」への講師派遣も行った。また、愛媛県との連携協定に基づき、法文学部の協力を得て、県民向けの「消費者講座」と法文学部生向けの「法学特講（消費者問題講義）」を合わせて開講し、多くの県民および学生が受講し、好評を得た。昨年からの研究開発してきた「ぎょしょくカード」の利用調査も開始し、多くの自治体・学校関係者から問い合わせが続いている。このカード等を活用して、宇和島市のサテライト事業の一環として、イベントへの参加、小学生向けの食育講座の開講なども行った。昨年度末に連携協定を結んだ「まちづくり松山」との連携により、今年度は法文学部の学生による松山市中央商店街の夏の夜

市への出店などを進め、若者の地域活動への参加を図った。

2008年1月には、愛媛県出身の映画人・伊藤大輔に関するシンポジウム「伊藤大輔の世界」を開催し、戦前の映画を上演するなどして多くの市民を集め、好評だった。プロムナード・コンサートは今年度2回、「ダンス・コレクション」と「バーゼンドルファー・ピアノ・コンサート」を開催した。（宮崎 幹朗）

2 重点研究活動

2-1 愛媛県南予の地域振興：地場産業とまちづくり

本研究グループでは、地域経済の落ち込みが懸念されている南予地域の現状と課題を調査・分析し、高齢化・過疎化の進行する中で地場産業の振興策やまちづくり、地域に根ざした食育の推進など、地域振興の具体的方策についての議論を行ってきた。

2007年度は、9月（伊方町）と2月（宇和島市・鬼北町）に南予地域の現地調査を主要なメンバーの参加により共同で実施し、公開研究会を3回開催した。また、各メンバーの個別テーマによる調査は年間を通じて継続的に行い、愛南町・宇和島市等を対象に研究をすすめる、その成果を報告書としてとりまとめたほか、愛南町をフィールドとした食育実践については書籍として刊行した（『ぎょしょく教育』筑波書房）。

2007/06/26 「西予市における地域産業の現状」和田寿博（法文学部）および学生

2007/07/13 「愛南町発『ぎょしょく教育』の発展と今後の課題」若林良和（農学部）阿部 覚（農学部）

2007/07/30-08/01 南予現地調査, 法文学部教員1名・教育学部教員1名, 訪問先: 宇和島市

2007/09/25-26 南予現地調査・視察, センター教員1名・法文学部教員3名・学生12名, 訪問先: 伊方町

2007/12/11 「愛媛県伊方町における地域活性化の取組み～現地調査から～」和田寿博(法文学部)

2007/05-12 南予現地調査, センター教員1名, 農学部教員1名, 訪問先: 愛南町, 宇和島市

2008/02 南予現地調査, センター教員1名, 法文学部教員3名, 訪問先: 宇和島市, 鬼北町(野崎 賢也)

2-2 地域の文化資源の再開発: その理論と実践

愛媛の地域は、古来、豊かな自然と文化に恵まれ、また創造的営為に富んだ幾多の人物を輩出してきた。しかしながら、グローバリズムの急激な進展により、多様であったはずの地域文化の画一化が進み、文化の貧困と枯渇を心配しなければならない事態となっている。地域の豊かな文化資源を再開発し、その普遍的価値を共有するにはどうすればよいか。本研究は、その方法と可能性を3つのグループにより、理論と実践の両面から、切りひらく。

2-2-1 多文化共存と地域

第1研究グループ(地域創成原論チーム)は、地域創成の原理論の学際的研究を推進している。本年度は、地域において異質であることの権利と共存の条件を、政治、法、文芸、福祉、経済などの視点から複眼的に考察する研究の2年目である。この研究を通して、地域の固有の価値とは何か、あるいは地域の輝きを失わせている真の要因は何かという問いに迫りたい。

2007年度の研究例会の開催は次の通りである。

2007年6月7日(木曜日)

『地域創成研究年報』第2号掲載論文合評会

1 立川信子氏「林 康次著「アメリカスにおけるローカリズム、旧南西部と南西部ーフォークナーとアナーヤの〈帰郷〉物語をめぐってー」について」

2 松野尾裕氏「中西典子著「生協職員の労働事情にみる組織間比較ー愛媛県内の地域購買生協および医療生協の職員意識調査をもとにー」について」

2007年11月8日(木曜日)

林 康次氏「グリッサンの関係の詩学/アナーヤの南西部の関係性回復へ」

2007年12月6日(木曜日)

岡村 茂氏「フランス地方行政の諸相と地域の民主主義ー『行政レベル間の競争と国家の変容: ケベックとフランスにおける地方行政』ラヴァル大学出版局, 2005年におけるフランス側報告を中心にー」

横山信二氏「ガティノー都市圏の形成と地域中心の再定義」

2008年2月7日(木曜日)

中西典子氏「ポスト福祉国家の公私分担をめぐる比較社会学」

松野尾裕氏「賀川豊彦の経済観と協同の構想」

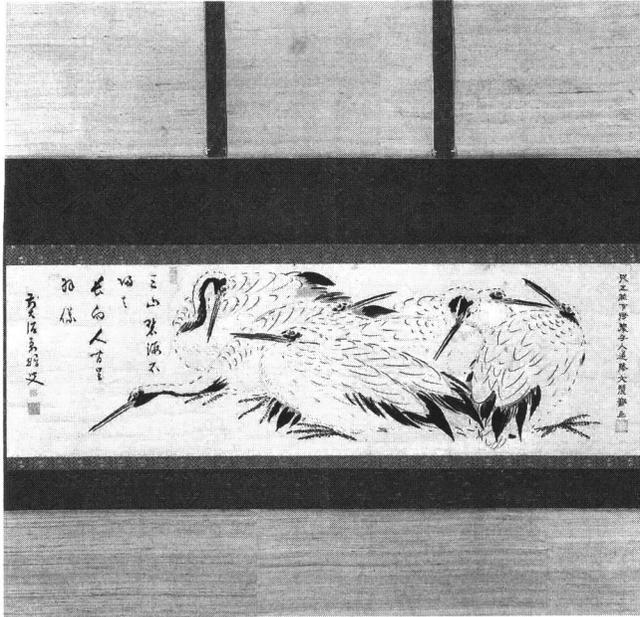
2008年2月28日(木曜日)

立川信子氏「小説の中の地域の現実と虚構ー大江健三郎の「四国の谷間」をめぐる物語の中のフランスー」

モヴェ・エリック氏「フランス地方言語の位置づけとは」(松野尾 裕)

2-2-2 南予文化再評価のための総合的プロジェクト

【内容】一般にはあまり知られてはいないが、南予には一途な情熱で人生を貫いた人々が多い。たとえば、簡野道明は日本の近代漢文教育の父といってよい偉人である。中国という文化大国の理解のためには、国民的な漢文教育が不可欠であるとして、多くの漢文教科書や訳解を作ったほか、『字源』というすぐれた漢和辞典を刊行、今も根強い支持を得ている。



また『鉄道唱歌』で知られる大和田建樹、嵐寛寿郎主役の『鞍馬天狗』、片岡千恵蔵の『宮本武蔵・二刀流開眼』、阪東妻三郎の『王将』、『竜馬がゆく』をベースにした『幕末』などの映画監督伊藤大輔、末広鉄腸やその孫の恭雄というあのお魚博士がいたり、それらに開明学校、平賀源内、芭蟬の母、劇場、芸能、和歌、高野長英なども加わり多彩かつユニークな文化が南予にはある。当該研究プロジェクトは、これらの文化の再発見もしくは発掘を目的として展開するものである。

【成果】各分野については、大和田建樹、大谷文楽、簡野道明、平賀源内、久保 喬、伊藤大輔についての調査が進められている。

そのうち、簡野道明と平賀源内については、加藤国安「近代漢文教育のパイオニア―簡野道明の愛媛時代」(愛媛大学プロジェクトチーム編『えひめ 知の創造』、愛媛新聞社刊、2007年)、福田安典「平賀源内の誕生―愛媛の視点から」(同上)として発表されている。

伊藤大輔については、2007年度地域創成研究センター主催のシンポジウムとして「伊藤大輔の世界」を、立命館大学の富田美香氏、愛媛で映画関係で活躍されている野中 晃氏(松山キネマ倶楽

部)、田部 司氏(シネマニア宇和島)らを招聘して2008年1月に開催した。

【新収資料】大洲藩の加藤家は歴代、絵画に造詣が深い。特に加藤文麗が画業に長けていたことは愛媛ではなく、全国的に知られている。後年に高名な絵師として知られた谷文晁も、当初はこの文麗に教えを請うている。地域創成研究センターでは、その文麗の作品を新たに収集したので、あわせてここに報告する(写真参照)。

(福田 安典)

2-2-3 愛媛の音楽と美術―地域芸術文化のアクチュアリティ

第3研究グループ(壽 卓三、高安啓介、千代田憲子、岸 啓子)による「地域文化のアクチュアリティ」研究は、2007年度で3年目を迎えた。今年度は美術(映像)と音楽が半ば独立的に活動したが、その間研究会等での意見交換を通して作品・調査の改善に貢献し、最終的にはグループ全体で成果を共有する形をとった。

1. スクリーンセイバー制作に向けて

2006年度のDVD制作による映像(化)研究の発展としてスクリーンセイバー制作を試行した。

PC付属のスクリーンセイバーは若者向きが多く、個人で制作する人は少数で、違和感を持ちながらそのまま使用しているケースもあり、目にする時間・回数に反して意識化されず、省みられていない等の現状から、質の高いものを提供する意味は大きいと判断した。自作写真をもとに千代田氏がスクリーンセイバーを数セット試作し、研究会での意見交換後若干の修正を施して改編試用版を制作した。現在第3グループではそのスクリーンセイバーを各自PCで使用し、完成度と効果を最終チェック中である。このプロセス終了後、制作者千代田氏の記名付きで地域創成研究センターHPにアップし、フリーのスクリーンセイバーとして大学内外での利用に供する予定である。

2. 四国の音楽活動—演奏活動調査

今年度の地域の音楽調査は、四国4県のクラシック音楽演奏会・活動について実施した。その際対象を地元の音楽家・演奏団体主体に限定し、四国圏外からの巡回・引越し公演は除外した。資料収集は、雑誌・文書・パンフレット・ホールや会館発行の催し物案内・月例コンサート情報などの印刷物とインターネット検索により、新聞のインターネット版も使用した。調査の結果以下5点が4県共通して注目された。

1. 四国内のプロオーケストラは瀬戸フィルハーモニー交響楽団（拠点香川、NPO法人）のみであり、プロオケ成立には経済的・文化的・音楽的基盤がおそらく厳しいこと。
2. 4県の主要な音楽（兼）用ホールは活況を呈し、また、徳島の第22回国民文化祭、愛媛県民文化祭でも音楽は重要な役割を果たしていること。
3. プロに匹敵する実力と評価されるアマチュア音楽団体も多数あり、プロ（個人：音大卒、音楽教師）が演奏活動の場を求めてアマチュア団体に所属する例も結構あること。
4. 地元アマチュア団体と国内外の一流演奏家との共演が極めて多く、外国の同傾向の団体とのアマチュア団体間の交流や共演例も複数あること。

5. 地域のオペラ団体・声楽団体のオペラ上演活動が各県で盛り上がっていること。

調査結果の一部は、文化庁支援事業『日本演奏年鑑2008』（日本演奏家連盟出版）に項目「四国」として掲載される予定である。

（岸 啓子）